

第4回区民版子ども・子育て会議

2022年2月10日(木) 18:30-20:30 オンライン開催

せたがやの在宅の子育て支援～園などに所属のない子育ての時期をどう支えるか～

最大111組参加

松田) 光が当たった人だけ救助されるのではなく、暗い海に投げ出された人も皆に光が当たるといいなと思っています。皆がもらえるライフジャケット、予防的にももらえるサービスや安心があったらいいな、というのと予防型:いつでも隣にいるよ、みたいな支援があったらいいのではないかな、と思っています。それから支援されるばかりではなく、支え手にもなれる場所ということで、区民版はずっとそのスタンスで今までやってきています。

もうひとつは、「地域みんなで子育てしよう」ということで、大玉送りでやっていきましよう、と知り合いのイラストレーターさんに描いてもらった絵ですが、こんなことを考えたりしています。

区民版はせたがや子育てネットが世田谷区さんに協力していただきながら共催してやっていますが、いろんな中間支援として活動している団体がコーディネートさせていただいています。

区民版は平成27年度から子ども子育て支援新制度がスタートする1年前の計画づくりの時、世田谷だと子ども計画第二期にあたり、計画が作られるのであれば、その計画に平行して自分たちでも対話の場を作ろうということでおこなってきました。

最初の年、平成26年度は11回実施、ほぼ毎月1回やっていました。終わると懇親会をしていて、いろんな人たちとフラットな場、要求の場ではなく、提案したりイメージしたり、妄想したり、たまに政策に反映してもらったり、信頼関係が築かれてきたのはすごく大きいと思っています。今日も世田谷区の方もたくさん所属を超えてご参加くださっています。ありがとうございます。

「在宅子育て支援」というテーマにしたのですが、在宅とは?ということで保育園、幼稚園、認定こども園に所属がない子どもたちという風に狭めてみました。もちろん育休中の方もこの中に入ると思います。日中子どもと過ごしている人たちのことを考える。1号認定、2号認定、3号認定から外れているので、給付の対象ではないので、0号とか4号とか言われ続けていたのですが、地域での支援のことをずっと言ってきました。違う在宅の意味もあって、一時保護された人たちが地域に戻ってきていると考えると社会的養護の世界では、そういう人たちが在宅支援と言っているそうなので、厳しい状況に置かれている子どもたち

のことも在宅という風に考えているんだということを知って、生まれてから保育園や幼稚園に行く前の人たちというだけではない、ということもある、ということで、そちらは子どもは18才までなので、そういうこともあるなと思ったりもします。

第二期子ども計画の草案になっている見守りのネットワーク図です。一緒に話しながら書いていただいたりしながら世田谷は進んできました。今度令和7年からは新しい10年を考えるとこころに来ていますので、今日は皆さんとざっくばらんな話ができたらと思います。

世田谷は困ってからつながるのではなく、日常からつながっているということが大事と前回の「おでかけひろば」のテーマの時にお話しさせていただいたのですが、困ってない時からつながっていた人たちは、行政の窓口にも相談にも着やすいというデータを示していただいて、地域の役割がすごくあるな、と感じているところです。

今日の区民版は「在宅」というテーマではありますが、参加して下さっている方は必ずしもそこで活動していらっしゃるお仕事の方だけではなく、いろんな分野に関心を持っていらっしゃる方がいらしているので、フラットに垣根を越えて一緒にいろんな話ができたらと思っています。

今回の区民版のちらしは、素敵な文言が書いてあるので、読んでもらってから始めたいです。この文言はYさんが書いてくれましたのでYさん読み上げてください。

せたがやの「在宅子育て支援」

～園などに所属のない時期の子育てをどう支えるか～

<ちらし文言>

松田：聞いてて泣きそうです。

Yさん：自分で書いても泣きそうでした。

松田：今日は区長も参加してくださっています。挨拶をお願いします。

区長：区民版子ども・子育て会議は何回かリアルにも参加させていただいています。とても大事な役割を果たしていると思います。

世田谷区では今から7年前、子ども子育て応援都市宣言をしました。これは、当時保育園が徹底的に足りないの、保育園をあちこちに作ろうとして、どんどん増えていきましたが、住宅地の中からは「静かな日常を奪わないで」みたいな横断幕がでたり、保育園は必要だけど、ここに作る必要はないというような声とか、場所によっては強烈にいただいたり所

もあります。やはり、子どもが未来の宝と言われますが、皆さんとの話し合いのなかで、未来だけではなく今の宝なんだということをしっかり出して、子育てを終えた方も子どもがいらっしゃらない方も、生まれてきて世田谷区の小さな仲間になることを歓迎しようよという趣旨で宣言しました。

それから7年間いろんなことがありましたが、フィンランドで相談の場を意味するネウボラも今日のテーマにぴったりかもれないですが、フィンランドの場合はネウボラお婆さんという保健師さんが妊娠がわかったというカップルと面談するところから始まって小学校にあがるまで、ワンストップサービスで、ずっと寄り添っていくということが紹介されて、そういうものが必要だな、と。しかしフィンランドよりはるかに人口の多い世田谷区では世田谷版ネウボラチームということでやってみようということで、これは世田谷だけでなくあちこちで生まれる前からフォローして包摂していこうというのは、始まってきたと思います。

この7年の中で大きかったのは2年前の児童相談所の開設です。世田谷区の児童相談所が、東京都の児童相談所と変わってスタートしました。その結果、都の児童相談所時代よりもはるかに身近に世田谷区の地域や学校や幼稚園、保育園など様々なネットワークの中で、子どもたちを見守り、また何か危険な兆候とか虐待の端緒みたいなのがあった時に命を守るという仕組みが動き出していると思います。

今、子どもが出生数でいうとだんだん勢いをもって生まれなくなってきている時期になっています。世田谷区はずっと全国的な傾向とは逆でどんどん子どもが増えている時期がありました。5年前まではずっと増え続けていたのですが、近年コロナの影響も多分あると思いますが、生まれてくる子どもの数が少しずつ減っていると、激減はしていませんが、少し減っているという状態です。待機児童も解消しました。一方で保育園の定員が埋まらないという問題も出てきています。ここで、子ども子育て応援都市宣言後、多分バージョンアップする時期に近づいているのではないかと感じています。

子ども用の施設や保育園も含めて統合したり、用途転換したりするような動きが子ども現象社会のなかでこれから起きてくるのが容易に予想されますが、私としては、在宅子育てという今日のテーマにぴったりですが、妊娠期から子どもが生まれてすぐの乳児期や孤立しがちな子育てを地域がしっかり支えるという資源として強くネットワークを濃く、深くしていく、そんな時期に当たるのではないかと感じています。

子どもが少しずつ減っていく社会に、子ども子育て支援も少しずつ縮めるという選択と広げるという二つの方向があり、私としては、子どもが減り始めている今だからこそ、子育て

支援の体形や細かく展開するとか、産後ケアセンターは一か所だけありますが、もっとそういった機能をさらに拡大するとか、そんな方向の議論を目指していきたいなと思っています。

松田) ありがとうございます。子どもが減っている今だからこそ、地域の子育てのところをしっかりと広げていきたいな、という言葉をいただけたので、すごく嬉しく思いました。

今日は皆さんで話し合うことがもちろんメインですが、いくつか事前にお話しただこうと親子のところに近い立場だったり、自分が真っ最中であるという人からの声と、それにあたり、制度とかサービスで頑張っている現場の声と2つあります。当事者の声からということで、まずは育休をとった人がちょうどいますので、ぜひ一言お願いします。

Mさん) 世田谷区の児童館職員です。よろしくをお願いします。うちは今、子どもが6人いて、6人目で育休をとりました。区長の話では子どもが減っているということですが、うちはうなぎのぼりに増えています。

一番上が中女子、二番目が小5、三番目が小2、4番目が5才、5番目が2才で、6番目が昨年12月1日にコロナだったので、自宅でみんなに見てもらって生まれました。今までは、育休まではいかずにお休みをもらいながら、仕事しながら育てていたのですが、今回6人目で初めて育休をとりました。一か月ちょっといただいています。家の中が児童館になっていることと、親も体力が減ってきているということで取らせてもらいました。

育休に入って思ったのは、すごくありがたいです。やっていることは変わらず、朝5時半に起きてなんだかんだしながらご飯やったり、送りだしたり、午前中公園行って、お昼食べて、迎えに行って、お昼寝したりしてまた公園行って、ご飯食べて、お風呂入れて、8時半には寝る、というそれを毎日当たり前のように繰り返しているという感じです。遊んだり、私の仕事は児童館なので、いろんな年代の子たちと遊んでいるのを、家でもいろんな年代の我が子たちと遊んでいるという感じです。

対象がうちの子たちと、あとは自分の近所の子たちで、近所の公園でいろんな子たちと遊んだりするので、対象がクリアになっているのはありがたいな、という感じです。育休して思ったのは、今までもそうですが、在宅子育てというのは、子どもたちと家族と一緒にありがたい時間ですが、いろんなイレギュラーが日々あって、それに対応しながら笑顔で子どもたちと楽しい時間を過ごすというのは、やはり親のゆとりだったり、余裕だったりがあってこそだな、と感じていて、親によっては、一人だったり、病気があったり、障害をもっていたり、とかいろんなケースがある中で、いつどうなるかわからないいろんなイレギュラーがあ

る中、当たり前な毎日を過ごしていくためには、やはり親にゆとりがないと笑顔で対応できないなど。

もう一つ、つながりみたいなのがないと、余裕だけでは難しいところがある。余裕とつながりという2つのポイントが子育てにはついてまわるなと思います。

つながりは、うちは恵まれていて、兄弟関係もいるので、その友達とか。徒歩30秒くらいにある公園にいろんなもの（ロープとか遊びグッズ）を持って行って、その子たちと遊ぶのですが、小さい子たちというお父さんが砂場で携帯を見ているとか結構あって、特に土日とかお父さんは、ママと違って積極的にコミュニティを開拓しなくてもいいやと苦手な方が多いので、僕は積極的に働きかけて、公園のネットワークが1才の子供がいるお父さんのコミュニティが出来上がっていて、そこに行けば何とかなるみたいになっている。

そういうつながり、市民力の活用みたいなのもないと、よく生きるというか、楽しく子どもも大人もできないのかな、と感じているところなので、これからにむけて行政的なサービス+市民ができるようなことサポートみたいなのも含めて一緒に考えていきたい。「ゆとり」と「つながり」というキーワードで考えていきたいと思って参加しています。

松田) ありがとうございます!!

今度はおでかけひろばに来ているお母さんの状況をGさん教えて下さい。

Gさん) おでかけひろば まーぶるのGです。ひろばは赤ちゃんが多いのですが、2歳とか未就園児の親は遠慮してひろばに行けないという声を聞きます。区立幼稚園を考えている方は、区立幼稚園は2年保育なので、それまでどうしようという、居場所をどこかで見つけられるといいな、と思って日々しているのですが、それほど広くないので、2歳・3歳が遊べるほど広くはないのですが、異年齢が関わって遊んでいく、そんな育ちを親子で見れる環境はすごく大事なとひろばにいながらいつも思っているのですが、やはりママたちが遠慮して来れなくなってしまうのがすごく寂しいなと思ったりしています。

コロナになってから、ママはどこかに行き詰って、子どもたちと遊ぶ理解のあるパパばかりでなくお家でリモートでお仕事されているのでお子さんと息をひそめて過ごしていたり、そういう時にひろばに遊びに来て、赤ちゃんが泣いたり、ここでは自由に過ごしていきなとママたちがほっと一息つける場所であってほしいな、と思っていつもやっている。理解のあるお父さんもなかなか少ないので、育休とれているお父さんも随分増えたなと感じることもあるが、ママたち側の話の聞いていると切り取って手伝ってくれるが、お父さんと一緒に育てていける、巻き込んでいきたいなと思っていますが、ひろばにはなかなかお父さんがい

らしていただくことが少ないので、そこも課題かなと思っています。

一時預かりもしていますが、コロナで制限があって、少ないのですごくお問い合わせもいただくのですが、どうしてもお断りせざる得ないという状況で、一時預かりも足りなくて、ママたちが一生懸命在宅で子育てしているのを支えてあげたいけど、やはりできないもどかしさも感じています。そしておでかけひろばも一生懸命アウトリーチを頑張っているのですが、いかんせん全然知られていなくて、何ですか？というところから始めていくところから。コロナもあるのですが、誰かに背中を押してもらえと行ってみようという気持ちになるという声も多いので、ぜひ母子保健の現場の方、医療現場の方から行ってごらんよ、大丈夫だよと背中を押してもらえとすごくありがたいなというのをこの場をお借りしてお伝えしたいなと思います。

松田) ありがとうございます。いろんな人たちの様子が分かったり、一時保育が足りてない感じとかわかりました。今日は押し出してもらえる側の方々もいると思います。妊娠期から来てほしいという事かな、とも思います。ネウボラと先ほどもありましたね。

ちょっと大変そうなお家庭のところは、子家セン（子ども家庭支援センター）でつなぐことをやっているのですが、今日は子家セン（子ども家庭支援センター）から北沢と烏山から参加いただいておりますが、Oさん、ちょっと話していただいてよいでしょうか？

在宅の親御さんの様子を子家セン（子ども家庭支援センター）からお願いします。

Oさん) 烏山子ども家庭支援課のOです。

今は明らかにコロナ禍の影響だなという貧困、虐待、DVなどこれまでとは異なる相談内容も増加しているなど感じています。世の中の的にも皆さんもご承知かなと思いますし、子家セン（子ども家庭支援センター）としてもそれは感じています。

在宅子育て支援ということで、虐待の死亡事例というものを考えた時に、0才児の死亡事例の50%を占めるということも非常に大きな問題だととらえています。そのためには妊娠期からの関りも丁寧にしていかなくてはいけないなと感じています。産前・産後はホルモンのバランスが崩れますし、新しい人間関係の構築ということで大きな不安とか苦痛などがあるということも予想されるので、それに伴う子育て支援のなかでのいろいろな課題に妊娠期からしっかり丁寧に取り組んでいく必要があるかなと感じています。

そのためには健康づくり課の保健師との連携が重要なポイントになってくるなと思っています

ます。また世田谷区はご存じの通り、都児相（都の児童相談所）から区児相（区の児童相談所）になったということで、今までにはなかった月1回の合同会議などを有効に活用しながら、お互いの見解のすり合わせとか支援の方向性の確認などが以前よりも充実してきております。一元化の中での児童相談、行政体制の構築とか支援ということで児相と子家センが関わっているなかで、はるかに迅速に対応できるようになったという実感があります。

先ほどネットワークで見守りたいとありましたが、この区民版子ども・子育て会議も一役を担っていて、この中でつないでいただいた顔の見える関係というものが非常に大きな在宅支援の在り方とか、在宅支援に大きく影響していると感じています。新たな顔ぶれの方々もいらっしゃるのかなと、地域の見守り体制にかかる仕組み構築のヒントもこの中にあるのではないかと、参加メンバーを拝見させていただいて感じましたので、また地域子育て支援コーディネーターさんにもいろいろ相談させていただきながら、新たな仕組みを考えていける可能性がでてきているのかなと感じています。

いずれにしても、現場にいる中で顔の見える関係性の中で、要対協（要保護児童対策地域協議会）の中で、顔の見える関係と合わせてですが、子どもの命を救うことがあるんだなと実感した事例もありますので、これからもネットワーク、子どもの見守り体制というものの評価とか構築というのをさらに考えていきながら進めていきたいと思っています。

松田) ありがとうございます。

次に社会福祉協議会がもともとやっていた事業を、区の事業としてスライドしたファミリーサポートセンターの乳幼児のところを教えていただきたいと思います。

Aさん) 世田谷区社会福祉協議会で、今は世田谷区からファミリーサポートセンター事業の委託を受けております。

ファミリーサポートセンター事業は、子育てを手伝ってほしいという方と、子育てのお手伝いができるよ、という方をつなぐ事業です。自主事業時代から20年以上たつのですが、当時からあったのですが、あくまでも労働省の管轄で、働くお母さんのための保育園のお迎えに間に合わない、という人が使っていただくような制度でした。当時から世田谷区では、在宅のお母さんも預かりが必要だよね、という考え方に基づいて、自主事業として行ってきた経緯があります。国のファミリーサポートセンター事業が在宅のお母さんにまで範囲をひろげきた経緯もあり、平成27年度から新しい事業に移行して現在に至っています。

現在の状況は利用会員さんが利用できる方は生後43日目から小学校6年生までの保護者の方、利用会員登録は1万人を超えています。援助会員さんは18歳以上で研修を受けた方

にご登録いただいておりますが、1100名ぐらい。9倍ぐらい差が開いています。とはいっても、実際に使っている利用会員さんの数は本当に一部に限られていて、実績の表で実利用会員数は12月358名、実活動の援助会員さんは208名。何かの時に頼りになるかも、と登録いただいている方も大勢いらっしゃいます。いざという時に登録して、困った時にご紹介できないとすぐには使えなくて10日から2週間かかる場合もあり、事前顔合わせなどの手続きをふんでから利用することになり、使いづらいという声もでているのも事実です。正しい情報を正しく伝えることに苦慮しています。

コロナ禍なので、公共機関を使つての送迎はできない、徒歩15分圏内での送迎など距離や時間での制限があります。今年度10月からは利用会員登録は専用の案内サイトから入会申込書のダウンロードで申し込みができるようになりました。今までは説明会に参加してから登録でしたが、今までより短い期間で登録できるようになりました。10月以降は登録が増えています。援助会員も増やすために、世田谷区で安全な預かりのための講習も数日間通うことになり、世田谷区オリジナルの講習もあり、会場の確保が難しくオンライン化の検討もしているところです。実技は必須なので最低1日は出ていく必要があります。援助会員になりやすいように考えています。

コロナ禍で子どもが手をつなぎたがらない子どもが増えてきている。乳幼児も手をつなぎたがらないという子も多くなっている。普段お母さんが自転車送迎が多くなって、子どもと手をつながないという状況も増えてきているのではないかと。送迎を希望するお母さんには日ごろから手をつなぐ習慣をつけてもらうのも、子どもの安全につながるのではないかと考えています。

松田) ありがとうございます。子どもと手をつないで街をゆっくり歩くことが奪われているというのも衝撃でした。子育てしているけど、他のお子さんも手助けできるというのも助け合いということでもいいところですが、サービス慣れしているのかな、と思いました。

1時間800円という金額も安く感じる人もいれば、その金額もだせないというのはコーディネーターに寄せられている声だったりもします。

今日は保育科のO課長さんもいらしているので、保育園で地域の子育て支援に取り組んでいる話を聞きたいと思います。

保育課 O課長)

私は平成22年から25年まで係長で保育科にいました。その時は毎年のように保育園が増えていくような状況で、就学前人口も毎年1000人前後増えている状況でした。昨年度

から保育課長着任して、その当時に比べてまさかこんなに早く待機児童がゼロになるとは夢にも思っていませんでした。

令和2年度に待機児が解消しまして、今年度も2年続けて待機児がゼロになりました。昨年4月はゼロ歳児の欠員が目立った。9月、10月にはほぼ解消したという状況。育児休業制度が整ってきているのかな、と思っている。令和2年4月の保育園申し込みから育児休業の延長の話を聞いています。4月の入園時には328名の方、昨年4月の入園で489名、今年の4月の入園で470なので、定着してきているのかな、と受けています。

乳児を中心に在宅で子育てをされている方が増えてきているのではと思っている。都市圏、首都圏の核家族化、地域コミュニティの不足によって身近に子育ての相談できる相手がいない、孤立化するというお話もあります。コロナの状況で、本当は出産は里帰りする方が今まではいらっしやたが、なかなかできない家庭もいる。

親のみで子育てをしっかりとしていこう、子育ての悩みもお母さん、お父さんだけで悩みを解決していこうという一方、どこに相談していいかわからない、ネット上で見るとかしかないのかな、と思っている。そういう状況をふまえていくのであれば、安心して相談ができる関係ではないのかな、と感じている。そこで保育園が、保育士であったりとかあるいは看護師、栄養士がいるので、専門性を生かしながら地域での支援の充実をはかっていけるだろうと考えています。

これまでも保育園は、保育園の見学だったり交流事業で園庭解放など様々な取り組みを通して、保護者からの相談には応じてきたが、区民の方から見ると保育園はやはり預けている保育者しか対象にしてないのではないかという感じが見受けられる部分はあった。

一時保育は、保育園に入れない方がまずは空いているところということで、認可外保育施設を含めて一時保育を申し込んで、それでもいっぱいになってしまったところには当時ありました。

待機児が多かった時に、保育施設を整備する時にやはり子どもの声が社会問題になり、保育園と一緒に近隣関係を築いていけるのかという部分で苦心した思い出があります。保育園が地域に開かれた家庭の支援の充実はこれからも求められていくのではないかなと思います。

昨年の9月に今後の保育園の取り組み方針みたいなのを提案させていただきました。その中で、今後保育園をどうしていくかということ、福祉的部分の役割の強化という部分をっか

りやっていきましようというようなことになりました。

これまで、例えば緊急一時保育事業ということで、区立保育園では子ども家庭支援センターが家庭保育は困難と判断したお子さんを預かっていきましよう、これに加えて今年の1月から家庭保育絵は困難には至っていないが、一時保保育を利用することによって、家庭での養育に期待できるようなことを要件に加えてスタートしました。誰もが気軽に相談できる人や場の提供ということで、区立保育園に併設しているおでかけひろばで一時保育を今年の1月から実施している。今は2園で実施しているが、希望が丘保育園では予約開始日には満員になるという状況で、全ての利用可能日にはキャンセル待ち。世田谷保育園では少し余裕あるが、周辺にいくつかホットステイがあるということで利用者の声を聞くと預け先の登録をした状況。守山保育園のおでかけひろばでも利用を問わない預かりを始めます。

4月から私立保育園でも、就労とか介護の要件に加えて、子育て不安、育児疲れによる理由でも受け入れ可能な園からはじめている。これまでも各保育園で工夫をしながら地域交流事業を行っているが、人が集まらない、来てもらえないという部分もあり。来た人の声では働いていない人が保育園を利用していいのか？という声も聞く。こういった課題を克服するために、子育て支援として地域との連携をはかっていきたい。区立保育園では、おでかけひろば、児童館、地域子育て支援コーディネーターと連携をとっていきたい。区民の皆さんに取り組みを保育園でしていることを周知する取り組みもし始めている。民間私立の保育園の取り組みも集約しながら知らせていきたい。地域保育ネット、今までは保育に関する情報交換が主であったが、地域交流事業で共有しながら活動内容を増やししながら、子育て支援の保育園の役割を増やしていきたいと考えている。

松田) ありがとうございます。保育園もいろいろ考えて下さって、地域に開かれた保育園として在宅親子のことも考えて下さっている。皆が安心していつでも、ちょっと自分の時間が作れる預かりは必要なのではと思います。緊急保育の制度もあるが、出産のときに上のお子さんを預かれる制度もあるがいつ OK が出るのかドキドキしてきましたが、そういう事もトータルで考えて下さっている話もありました。

この後はこんな感じになったらいいのに、という話題も含めてグループで話せたらいいなと思います。

子ども・子育て会議の座長でもある森田先生に皆で話す時のポイントをお願いします。

森田先生) 赤ちゃんを育てている人の中では、3/4 が在宅。多くの人が在宅で子育てしている。これから働くにしても、今まで働いていたとしても、働かないとしてもゼロの時に在

宅でいることは主流。これからも在宅でゆっくり子育てできたらいいな、と皆思っている。少子化ってそのチャンスだと私は思う。親たちも充電できて、子どももゆっくり育つ。そんな社会を作らない限りは恐らくこれからの日本の中で、健康で子育てをし続けるのは、なかなか難しいと思う。

地域の子育て支援、在宅の子育て支援は、前の計画の段階から問題だった。だが、在宅子育ては中心においてももらえない。それはどうしたらいいのだろうか、ここは皆で考えないといけないと思う。

課題を持っているから、とか子育てが不安だからとか何か理由というのがないと預かってもらえないという形にしていると、利用しにくい。誰でも利用できるると逆にハードルが低くなって足りなくなる。その折り合いを双方でつけていかないといけないと思う。この折り合いってどうやってつけていくのか、地域の子育て支援は皆さん考えていると思う。入り口のハードルは低くして、誰でも預けられるようにして、本当に必要な人たちが、必ずその時に預けられる。

ファミサポもそう。ファミサポの人たちとも議論しましたが、ファミサポもどんどん重篤な子どもたちをあずかろうという話になっていって、そういう制度改革も行われている。ハードルを低くするにはどうしたらいいのか？そのためにはどういう協力を地域でしたらいいんだろう？そのあたりが一番の胆のような気がしている。

世田谷区はいろんなサービスを作っているが、サービスを利用しているから地域での仲間づくりができない、これは逆転している。本当ならサービスも利用できて、仲間もいる。あるいは仲間がたくさんいる中で足りない部分にサービスが使える。こんな風になっていきたい。

ハードルの低さとサービスを手厚くする。一見矛盾しているようなことが、両立した世田谷区にできるのか、そのあたりを中心に皆さんで議論して考えていただけたら、と思いました。

今、支援側はかなり協働してきている。今度はハードルを低くしないと皆で支え続けられないのかな。世田谷区は1960年代、70年代、支えあいが上手な自治体でした。外遊びも日本の中で本当に早くからスタートして、皆で支えあってきた。サービスができたなら支えあいが下手になってきたは困るわけで、両方が大事。ここがうまくできたら、世田谷区は子育てでにぎやかな街になる。それくらいの街づくりをしてほしい、と区長にもいつもお話している。そんな街にしていきたい。

松田) ありがとうございます。在宅で子育てしている人たちが街のなかにいると、子どもがうるさいとか言われたい、そんな街にしたいということですよ。

森田) 街によっては、三輪車がうるさい、泣き声がうるさいと言わないでという缶バッチつくらないといけないぐらいの街になってしまった。それは何とかしないとけない。地域のところはすごく大事な、と思う。

松田) ありがとうございます。公園で声かけまわります、と M さんが宣言してくれていますね。グループに分かれて話します。10人ずつのグループにするので、どれも正解、どれも大歓迎なのでいっぱいアイデアをだしてください。

<<グループタイムの報告>>

- ・頼るのが苦手
- ・世田谷区には資源がいっぱいあるが、大変な時はわからない。いわれるまで支援を使えなかった。見つけてくれる人が重要。自分で探すのは大変。
- ・信頼できる人がいること
- ・助けてくれる場所があることが大切。
- ・共感してもらうことも大切。
- ・子育て・乳幼児ケアにケアマネに近い仕組みがあることが大切。
- ・助けてって言っていい、助けを求めて助けてもらえる環境づくり。
- ・受援力は大切。
- ・地域内でのつながりも大切。日々、挨拶をすることで関係性が作られる。
- ・マイナスなことだけではなく、ポジティブなことも言える関係だと良い。
- ・支援側は信頼してもらえるといい。
- ・役所はいざというときに対応してほしい。困ったことが起きるのは夜間が多いけど、役所はやっていない。
- ・多世代で関わりながら行うことが大切。
- ・保育所に空きあるなら、医療的ケア児も入れて。インクルーシブ保育の推進を
- ・大学生世代とかに関しても支援をしてほしい。保育士を目指している人で子どもと関わりたいが、コロナかで出会える場所もなく、困っている人もいる。
- ・書類を書くのが大変。一緒にやってくれる人がいると良い。わからないとパニックになってしまう。
- ・大変だけど乗り切った経験は大切。
- ・保育の書類は結構大変。小・中のほうがもっと簡単。
- ・前向きにとらえられる機会になるといい。

- ・声かけることにも抵抗がある。不審者に思われないか、コロナなどの問題も。
- ・どんどん声かけていい。
- ・手をつなぐ経験を持っていないお子さんも多い。移動は自転車为主。
- ・お母さんになる前から知らせていくことが大切。
- ・支援者に聞かないと分からないという環境は良くない。
- ・冊子などで支援者側からのメッセージを伝えられると良い。
- ・支え合って親になっていけると良い。
- ・母子保健施設と繋がりたい
- ・世代間でつながり方が違ってきている
- ・アートでつながる
- ・地域資源として存続したい
- ・地域で大人と話す場が身近にたくさん欲しい。
- ・一緒に体験する機会
- ・ハートで関わりたい
- ・マイ広場を3つ持つといい
- ・双子の送迎どうにかならないか
- ・情報に強い人と弱い人
- ・困りごとを投げられる挑みたい SNS、前向きな解決に繋がっていく井戸みたいな
- ・パパが気軽にでていけるといい
- ・ワーママたちの居場所
- ・一時保育のニーズは高いが供給が足りてない、理由は？
- ・街の中でのしかけ作り 商店街や道遊び、公園での声かけなど
- ・周知の問題 プレイパークやプレイリヤカーもあるが、周知が十分ではない；こういう行政サービスがある、ということが、ネットで探し出せない。
- ・長期的な視点で受け手から担い手の循環を作っていくことが大事
- ・保育園の専門性を活かしたい、どれだけ可能性を広げられるか
- ・若い世代の子育てパパママは、地域のつながりを求めているのか。区の施策は、区民ニーズをくみ取る必要と、子育てに本当に必要なものを発信していくこと、両方大事。
- ・0歳の保育園の欠員を地域に何か還元できないか
- ・かかわりがもてるように、かかわる
- ・子育て仲間が支援する人になっていく仕組み
- ・保育園に入るまでに保護者が地域で成功体験をすることが大切。
- ・専門家が専門家として、行政が行政として機能するといいな
- ・ハッピーセパレート 
- ・お父さんを育児に巻き込むしかけ
- ・ネウボラなどを通して、おでかけひろばなどのつながる仕組みをもっと宣伝していったら

→知育教室などの産業の宣伝に持っていかれる保護者も多い。

・おでかけひろばや保育園も保健師との関わりや専門性も求めていることがよくわかりました。

・アナウンスを行政と共にできるといい

・赤ちゃん授業を中学生だけでなく成人式で若者に伝えるのはどうか

・保護者は困らないと工夫しないのでは？

→保護者の困り感と子どもの困り感は違う

→子どもの声に気づいていける大人が増えるといい

・一時預かりとは別の、軽めの市場も大事ではないか。

・公園でいろいろな声をかけると、繋がりができていく。

・市民力を活用することも必要なのでは。

・1つのキーワードは「近所」にあるのでは。

・無理なく、困る前に繋がれることが大切。

・世田谷区は商店街自体がよろず相談になっている。

商店街を含む、地域での子育てを広げていくのが目標。

・おでかけひろば自体が、地域連携のハブになれば。

・世田谷区は、おでかけひろばがあるのが特徴。

・下北では、道遊びを施行したりで、地域の繋がりができていている。

・“we love 赤ちゃんプロジェクト”

・保育園の中には、地域包括ケア的な（在園児のみならず、在宅支援にとどまらず、地域の支援の役割を担う展望を持っていることに素晴らしさを感じました。

・世田谷区 LINE や応援アプリは浸透するか？

・繋がりを持てると嬉しさを感じるし自信もつく

・じじばばとの協働を共育をもって行う

・子育てからの歩み寄りがあると進めやすい

・ママ同士のつながりだけでなく、パパ同士のつながり、ネットワーク構築の難しさときっかけづくりも必要。

・下北沢ぶりっじ利用した際、地域で大人と話せて、ほっと出来る場所だった。そこで仲間もでき情報交換もできた。身近な地域にそんな場所があるといい

・おでかけひろばが校区に1つくらいあるといい

・公園での外遊びで、子どもは子ども同士で遊び、大人は情報交換のおしゃべりをしていた。あそこに行けば安心できる場所に

<<そのためには何をしたらいいか？>>

・保健師に理解を求める

- ・フリーコーヒー（フリービールは既に公園でやっている）
（場所や専門家でなくても、普通の人でもできるのが大事）
- ・商店街のリアル店舗でお買い物ごっこ/商店街フラッグの作成
- ・歩行者天国にらくがきスペース
- ・おとなは子どもを気にせずお買い物；ふんわり一時預かり
- ・空き家活用 空き地がほしい
- ・企業を巻き込んだ企画
- ・マンション建築時の、騒音防止のフェンスへの落書き
- ・今日のメンバーがチームになって何かを具体的に形にしよう
- ・小学校や中学校の中に、赤ちゃんのおでかけひろばを作る
- ・高齢者（リタイアされた方）にひろばに来てもらう
- ・ご近所の人に口コミでお願いする、一緒にゴミ拾いや野菜作り
- ・生で触れ合っていこう
- ・ママたち同士を繋ぐ意識
- ・自分の住んでる地域で声掛けする。顔見知りになる
- ・施設の入り口を大きくする。入りやすい施設に
- ・町で出会った親子に声をかける
- ・デジタルからのリアルに
- ・SNS の活用
- ・専門職同士がつながって、困っている人にバトンをつなぐ
- ・共に体験 相談する人もされる人も一緒に
- ・困っていることをそれぞれアピール
- ・隣のジジババの力を借りる!私もなる!
- ・おせっかいを!
- ・町で出会った親子に声をかける
- ・あいさつ運動。親にやってもらったことをしてあげたい。
- ・拠点保育園の活用
- ・まちせんをもっと利用する。サロンのようにする
- ・マイ保育園
- ・かかりつけ保育園を作る→行きつけ
- ・公園遊び→遊べる大人を育てる。プレーパークで大人が楽しむ日を作る。子どもがぐずったときの興味の引き方など大人も育て繋がる場所
- ・地域でいいなと思ったことを、まわりに紹介 口コミ力を活用
- ・アートの拠点づくりで子育てに貢献
- ・お店や普段行ってる場所ですつながる。カフェなどお店に寄れるアンテナに
- ・一緒に食べられないなら、同じ食べ物を作るみんなの畑 →コミュニティ農園、amigo 実

施中

- ・jeebーをおでかけひろばに呼ぶ。活躍の場を
- ・ステッカー 小さな子大歓迎
- ・子家センに子ども用トイレを設置！
- ・子家センをちょっとした遊び場に！
- ・ひろばで小さな産後ケアしたい
- ・コンサート 妊産婦さんを無料で招待して繋がりつくる
- ・佐賀県のように、公務員も2つ名刺もつくるくらいな勢いで、地域の活動に参加
- ・保育園で公園行ったら、親子だけで遊んでいる人に声かける
- ・父親に役割を与える、子育てを学ぶ機会を作り、パパが自信を持って子育てをすることで、ママの子育て軽減を！
- ・テーマをもったオンラインの声かけをつながりのきっかけに
- ・既存の行政施設、窓口、民間支援などが横のつながりを持って一緒に困ったことをいつでも話してね！キャンペーンをする
- ・保育園の設備や人材をもっと活用できるはず！
- ・パパハウスつくろう きてービール渡すから
- ・公園で大人が遊ぶ
- ・保育園の専門性をもっと活用する。沐浴の仕方、沐浴室の活用ができる。
- ・若い世代の感覚と子育て終えた40代50代の世代の感覚が違ってないか？という問題も話し合いました。世代間で「つながり」の意味合いが違うのかも、新型コロナの影響で、リアルでなくオンラインでのつながり方を学んだ世代、未来の世代に対して環境を整えられるといいのかな、と思いました。例えば、オンラインファミサポとか、どうでしょう？
- ・小田急電鉄のご協力で、世田谷区内の小田急沿線の駅に世田谷版 We LOVE 赤ちゃんプロジェクトのリーフレット配布してもらっています。

Hさん：これからパパになる。自分自身もおでかけひろばや児童館にも行ってみたい。パパ企画の時は行きやすいが、普段パパもふらっと行けるといいな。公園デビューで助けてもらう人いるといいな。

松田) パパが作ったこそだてひろばがあります。土日にワーキングプレイスを子育てひろばにしています。

Iさん) ポッポちゃん広場もパパ率高い

amigo) テレワークの時にワーキングスペース使うとかあれば・・・

松田) 絵本をパパたちからも聞かせてもらいたい

★保育園はゼロ歳児保育をしているので、沐浴室があります。一日一人しか入らないので空いています。保育士が専門家なので沐浴もできる。10月には全員1才児になってしまうので使ってないので、利用してほしい。他の園もあけてもらうように伝えます。

Kさん) 卒園した保育園との年賀状をやり取りしていますが、中・高生が体験もできるようにしているとお知らせが来た。OG,OBが中学生になった時に連絡できる予算があるといい。→その時にファミサポ登録もできるようになるといいですね。